

歴代の天皇が引き継いだ黒作懸佩刀

天平勝宝8年(756年)、盧舎那仏に献納された六百数十点の宝物目録、『国家珍宝帳』には、7カ所に「除物」の付箋が貼られている。宝物として献納されたものの、リストから外して宝庫から取り出されたのだ。「除物」の扱いになったのは、さいかくのれん信幣之物、さかいのけん犀角簪、やうのほうけん陽宝劔、いんのほうけん陰宝劔、よこがたな横刀、くろづくりのかけはき黒作懸佩刀、けいこう挂甲の7点だ。このうち陽宝劔・陰宝劔については、先月号で紹介したとおり、盧舎那仏座像(大仏)の膝元から明治時代に出土した「金銅鎮壇具」の金銀荘大刀2口が該当することが最近になって判明した。「金銅鎮壇具」には、鉄板を綴り合わせた鎧も含まれていて、「除物」の挂甲にあたる可能性が高いと考えられている。しかし、それ以外の4点の宝物は、依然、行方不明になったままだ。

行方がわからない「除物」のなかでも、黒作懸佩刀は、『国家珍宝帳』に記された由来によれば、草壁皇子が常に身につけていた佩刀が、その擁護者だった藤原不比等に託され、その後、文武天皇に献じられたものの、文武天皇の崩御にあたって再び不比等に返され、不比等が死を迎えた際に、聖武天皇(当時は首皇太子)に献上されたことがわかる。同じく『国家珍宝帳』に由来が記された^{せきしつぶんかんぼくのおんずし}赤漆文欄木御厨子は、天武-持統-文武-元正-聖武-孝謙と、性別の区別なく、天武天皇直系の歴代天皇に受け継がれたものだった。しかし、黒作懸佩刀は、女性天皇の手には渡らずに、藤原不比等を介して、草壁-文武-聖武と、男性のみに継承されたことが注意される。ちなみに、有名な高松塚古墳から出土した大刀の飾金具には、動物文様があしらわれ、鞘や刀身は失われているものの、正倉院宝物と遜色ない立派な大刀だったことが窺われる。被葬者の人骨は、調査によれば熟年男性のものだった。

さて、祖母の持統天皇からの譲位によって、14歳の若さで即位した文武天皇が、亡き父の草壁皇子が愛用していた黒作懸佩刀を藤原不比等から受け取ったのは697年のこと。その4年後、大宝元年(701年)の元旦には、威儀の整った藤原宮で、「文物の儀、ここに備われり」と高らかに宣言し、翌大宝2年(702年)には33年ぶりとなる遣唐使を派遣するなど、律令国家の基礎を固めていく。それを見届けた持統天皇は、翌大宝3年(703年)に崩御し、飛鳥岡で火葬されたあと、夫の天武天皇が眠る^{ひのくまのおうちのみさぎ}檜隈大内陵に合葬された。後を追うかのように、慶雲3年(706年)、病のために25歳で崩御した文武天皇の亡骸は、慶雲4年(707年)、祖母と同じく飛鳥岡で火葬され、^{ひのくまのおこのみさぎ}檜隈安古山陵に葬られた。

飛鳥の聖なるライン

天武・持統天皇が造営した藤原京の中軸線を南に延長したライン上に位置しているのが、天武・持統天皇の合葬墓とされる野口王墓山古墳だ。明治13年(1880年)、京都の高山寺で発見された『^{あおきのさんりょうき}阿不幾乃山陵記』には、文暦2年(1235年)にこの古墳が盗掘を受けた様子が詳述され、金銅製の棺台の上に漆塗り木棺が置かれ、金銅製の外容器に銀製の骨蔵器があったと記されていた。前者が天武天皇の棺、後者が持統天皇の火葬骨を納めたものと考えられることから、天武・持統天皇を合葬し

た檜隈大内陵墓と判明したこの古墳は、現在、宮内庁が両天皇の陵墓として管理を行っている。同じライン上には、この野口王墓山古墳のほか、中尾山古墳、高松塚古墳、キトラ古墳が一直線に並び、

「飛鳥の聖なるライン」とも呼ばれている。檜隈とよばれるこの一帯は、天皇や皇子などの限られた貴人だけが葬られる特別な場所だったと考えられるのだ。

それでは、文武天皇が葬られた檜隈安古山陵はどこなのか。宮内庁では、高松塚古墳の南方に所在する塚穴古墳を、文武天皇の檜隈安古丘上陵として管理しているが、高松塚古墳から谷をひとつ隔てた丘陵上にある中尾山古墳こそが、文武天皇の檜隈安古山陵ではないかとする説が江戸時代からあり、近年の調査研究でその可能性が高まっていた。中尾山古墳は、早くから国の史跡に指定されていたが、昭和45年(1970年)に行われた測量調査で八角形墳である可能性が指摘され、昭和49年(1974年)の発掘調査で、約30mの3段築成の八角形墳であることが明らかになった。埋葬施設は、凝灰岩と花崗岩の切石で造られた^{よこぐちしきせつかく}横口式石槨で、花崗岩の底石の中央には約60cm四方のくぼみがあった。このくぼみは骨蔵器を安置する台座を置いたものと考えられ、火葬された文武天皇の檜隈安古山陵としてふさわしい。

世界遺産候補「飛鳥・藤原の宮都と関連資産群」の登録推進に向けた事業として、明日香村と関西大学が共同して今年の9月から進めていた中尾山古墳の再発掘調査では、八角形を呈した墳丘の形状や段築・裾石の状況が改めて明確になり、「真の文武天皇陵」として大きく報じられた。2020年11月28日、歴史文化学科の学生研修行

事として実施した「飛鳥を歩く2020」では、学生たちと飛鳥の遺跡や寺社の見学を行ったのだが、ちょうど、中尾山古墳の現地説明会と偶然に日程が重なったのは幸いだった。発掘現場の様子を現地で見たとされる八角形を呈していて、外側からの観察ながら、埋葬施設の石材はたいへん立派なものだった。春学期は遠隔授業が続いていた1年生たちも大勢参加したが、オンラインでは味わえない貴重な体験となっただろう。



写真1 宮内庁が管理する天武・持統天皇陵 (野口王墓山古墳)



写真2 再発掘された史跡・中尾山古墳